

# 海外ロングステイの嚆矢 — 古代ギリシアの海外移動

A begining of overseas longstay-the case of ancient Greece

今 防 人

英語コミュニケーション学科非常勤講師

## はじめに

20 世紀末には「21 世紀には観光は世界最大の産業」としばしば言われ 21 世紀に入り事実そうになった。日本の観光事情を顧みても数十年前と現在とはまさしく隔世の感がある。昭和 20 年の敗戦の結果、日本は占領軍により統治され海外渡航は厳しく制限された。外貨の持ち出しは制限されたしビザも簡単には下りなかった。多くの日本人にとって海外旅行はまさしく「憧れのハワイ航路」に類するものでしかなかった。海外旅行は「外遊」と称され、一部のエリートや僥倖に恵まれた人々のものでしかなかった。

しかし、日本人のたゆまぬ努力、国際環境など様々な要因により日本経済は急激な成長を遂げた。個人所得も着実に増大した。1970 年 8 月にドルと金の交換性が停止されて通貨危機が発生し同年 12 月のスミソニアン体制で円が 16.88% も引き上げられた。さらに 1973 年春以降世界は変動レート制に移行し円は急激に上昇した。一方、アメリカの航空機製造メーカーのボーイング社のジャンボ機（ボーイング 747 超大型輸送機最大乗客数 550 名、初飛行 1969 年）を 1970 年日本航空が採用した。これらの要因は日本人の海外旅行を史上初めてと言えるほどに安価で容易なものとした。

江戸時代の鎖国が解かれた明治以降大多数の日本人にとり海外経験の最大のものは戦争と植民地によるものだったと言えよう。

戦争の体験は主として男子に限られるものであったし現地で自由に行動できるものではなかった。初めて見る異国での経験が兵士たちの生涯に大きな記憶となっていたと思われる。しかし、負け戦であった太平洋戦争の思い出は多くの場合なお封印されたままである。もっぱら戦争の一般論的否定の文脈で語られる物語だけである。各論的な記憶はごく少数に止まっている。

植民地への旅行は現在ではあまり顧みられていないがかなり多くの内地人現地人が行っている。また現地における観光資源の開発は今日の観光資源の基礎の一部を形成したものとおもわれる。例えば、昭和 5 年社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー発行の『旅程と費用概算』には「台

灣」「朝鮮、満洲、支那方面」と題する諸章があり主たるコースと費用が出ている。また学生、教員、舎監は「鐵道省二割引、朝鮮鐵道局四割引、満鐵五割引、大阪商船二割引」と優遇していることがわかる。

また台湾、朝鮮、満洲、樺太、南洋州などの植民地に大量の日本人が進出したことは歴史上の事実である。軍人、役人、商人、会社員あるいは学生として多くの日本人が現地で暮らしていた。また長期出稼ぎを念頭にたくさんの日本人がペルー、ブラジルなどの中南米諸国あるいは移民者の子供や孫がアメリカ、カナダに暮らしていた。これらの人々の多くがよりよい暮らしを求めて半ば強制的に海外出稼ぎを余儀なくされたと言ってよい。

1970年代になり初めて日本人の多くの人々が自発的意思に基づき海外に出かけるようになった。その多くは海外観光旅行や留学という形をとった。強制的な戦争や半強制的な出稼ぎとは異なり自由に海外へ出かけるようになったのである。

さらに既に20年近く前からフィリピン人花嫁が日本人農家に入ってきている。3K産業と目される農家には日本人嫁が来ないことからである。しかし、この現象は現在の人口減少の予兆でもあった。日本は人口減少が明確となり表面的には移民を口にするものはばかれるものの実質的な移民政策をとらざるを得ない事態に入っている。近年になり法務省は就学生と留学生の区分を廃止し留学生一本化とする意向を明らかにした。またこれまで卒業後の留学生のビザ延長を半年に限っていたのを1年間に延長した。高学歴を有する外国人から長期滞在をしてもらう意図が明白である。事実上の単純労働者の短期移入である研修生制度もまた曖昧な状況に置かれているがいずれ決着を迫られるだろう。フィリピンやインドネシアからの介護福祉士や看護人の候補生の導入は条件が厳し過ぎ不人気である。早急に条件の緩和が望まれる。台湾では寝たきり老人の世話をする外国人を認めている。数年にわたり介護をしているケースもある。

以上、日本のアウトバウンド、インバウンドの状況を点描したが一口で言うならば日本人も外国人も出入りがかつてないほど激しくなりつつあることである。

しかし、このような移動の激しさは日本に限った現象ではない。世界は急速に移動の時代に入ったと言ってよい。国内的には農村部から都市部へ、国際的には発展途上国から先進産業地域へと人々の流れは途切れることがない。中国河南省ではわずか数年間に省外からの流入人口が1,000万人を超えている。また数年前の話であるが100万人のミャンマー人がタイへ流入してきている。フィリピンのように外貨獲得のトップが海外の出稼ぎからの送金である国や2002年からの政策変更により海外への積極的な出稼ぎ解禁を実行したベトナムのような国も出てきた。現在、日本の研修生が中国に次いで多いのがベトナムである。

EUを構成する各国の国境はますます低くなっている。

## 一. 人類の発生と移動

人類の発生に関しては近年、考古学、自然人類学等の著しい発展により次第にその全容が明らか

かになりつつある。ここではそれらの成果をまとめた概説書によりその発展を跡付けたい。<sup>1</sup>

人類の歴史はおよそ前 700 万年に始まるとされる。この時期に人類の最古の祖先はアフリカの森林地帯を離れたとされる。原因は人口の過剰と居住環境の劣化だと考えられる。彼らはアフリカ東部の草原地帯への長い旅を余儀なくされた。人類史上初めての移住者は何千年もかけて新しい環境に適応していった。分厚い体毛は薄くなり彼らは直立で歩行し始めた。このことは人類の進化が移住という行動、そして新しい環境への適応という行動と根源的に結びついているとされる。

氷河期が終わる 10 万年前の前 200 万年にアフリカに出現したホモ・エレクトスは地球の温暖化に恵まれて食料の欠乏におびえることなく自由に移動するようになった。ホモ・エレクトスはまずアフリカ南部へ、次に現在のサハラ砂漠から地中海方面へ、北方は中近東を通過してクリミヤ地方まで達し、北東部方面に向かったグループは現在の東南アジアで北は中国へ、南はインドネシアへ向かった。しかしながらこの人類初の大旅行者は 50 万年前に死滅したと考えられている。

40 万年前から 13 万年前にかけてのある時期に遺伝的には最初の間とされるホモ・サピエンスがアフリカに生まれた。彼らはホモ・エレクトスの足跡をたどり全世界に向け旅することになる。その旅の開始時期は 9 万年前から 8 万 5000 年前とされる。

## 二. ギリシア現象

言語学者はインドヨーロッパ人の実在を確信している。約 6000 年前にまだ同室の集団で移住を始めていないなおも新石器時代の段階にあったインドヨーロッパ人はカスピ海周辺のどこから移動を開始した。世界の人類の移動史の壮大な例である。インドヨーロッパ人についてはなお多くが謎に包まれている。しかし、ほとんどのヨーロッパ人の祖先であるこれらインドヨーロッパ人の解明こそ世界史の解明につながると考えられている。

これまでまず比較的多くの史料が存在しているギリシア人の移住について考えてみたい。ギリシア人こそはヨーロッパの一つの源流だからでありその移住の歴史はその後の人類の移住の一つの重要なタイプを表していると思われるからである。

ギリシア人はそもそも誰を指すのか？ 果たして統一体としてのギリシア人は存在したのか？ 存在し始めたのはいつ頃なのか、という厄介な問題がある。最近のギリシア史の専門家の間では主観的契機を重視しているようである。<sup>2</sup> つまりギリシア人の民族的アイデンティティである。

「マイヤーが〈ギリシア人になる〉という点に焦点を当てたのはギリシア人の起源に関するますます不毛な論争に対する主たる進歩を表している。」<sup>3</sup>

民族的アイデンティティを担保するものとして言語の問題を挙げることができる。つまり、一つには具体的にはギリシア語の成立の問題である。さらにはギリシア語のアルファベットの成立の時期である。周藤芳幸は、B・パウエルの研究に依拠しながら、ギリシア語のアルファベット

<sup>1</sup> ラッセル・キング編、蔵持不三也監訳、リリー・セルデン訳、2008 年、『図説 人類の起源と移住の歴史—旧石器時代から現代まで—』終風舎。2008 年。

<sup>2</sup> Jonathan M.Hall 2002 HELLENNICITY—BETWEEN ETHNICITY AND Culture—The University of Chicago Press, Ltd., London.

<sup>3</sup> Jonathan M.Hall 同上。

がどのような過程を経てフェニキア文字から想像されたのかという問題を検討している。<sup>4</sup>

「パウエルによれば、ギリシア語のアルファベットも特定のギリシア人（パウエルは「アダプター翻案者」と呼んでいる）がフェニキア人の「インフォーマント情報提供者」から学んで作ったものだった。前八〇〇年頃にアル・ミナやレフカンディのような場所で「情報提供者」と出会った「翻案者」は「情報提供者」がフェニキア文字の一覧表を示しながら「いろはにほへと、ちりぬるをー」という風に順番に唱えていくのに従ってそれらを習得した後に、その記号を使って近似的に自分が話しているギリシア語を書こうとした。その際、個々の記号が指す音について「情報提供者」に確認するときには、発音の難しいフェニキア文字に便宜的な母音としての A を添えたり（アルフ→アルファ）、語末の子音を省略したり（ロース→ロー）することで対処した。さらに「翻案者」は長短を無視して五つの文字を選び（Ωが追加されたのはのちのことである）、これをギリシア語の母音に適用することで、新しい文字でギリシア語の音声をより正確に表記できるようにした。」

このギリシア語の起源がフェニキア文字にあるようにギリシア人は多様な文明との交流を通じてアイデンティティを確立していったとされる。

古代ギリシア文明の舞台は東地中海である。この舞台は、なによりも古代ギリシア人の文化とエジプト人やフェニキア人をはじめとする地中海沿岸地域の文化との複雑な相互作用を通じて形成された場だった。周藤によると、この場の後背地域である地中海の北側、北アフリカの沿岸地域、地中海の東端部という三つを結ぶのがキプロス島、ロドス島、クレタ島、シチリア島である。すなわち古代の東地中海世界は、それぞれが固有の伝統を有する三つの地理単位を基礎としながら、これらを繋ぐ島々を介してギリシア人の文化圏と現地の人々の文化圏がモザイク状に展開する複雑な構造を有していた。<sup>5</sup>

周藤によると近年の古代ギリシア研究はこれらの文化圏との交流が想像以上に進んでいたことがわかってきたという。例えば、古代エジプトの影響は大きい。ミノア文明のサントリーニ島アクロティリ遺跡からは前 17 世紀制作の「ナイルの風景」というフレスコ画が見ついているし逆にエジプトのデルタでは、ヒュクソスの都アヴァリス（テル・エル・ダバア）から「牛飛び」を初めとする典型的なミノア文明のモチーフで彩られたフレスコ画が出土している。<sup>6</sup>

しかしながらこうした交易・交流は前 1200 年を前後とする時代に、深刻な混乱期を迎えたとされる。エーゲ海ではミケーネ文明の宮殿が相次いで破壊され、アナトリアではヒッタイト文明が破壊された。エジプト新王朝も勢力が衰え始めた。こうした混乱期に東地中海の各地をゆるやかに結びつけていた交易ネットワークも、次第に失われていった。これは「紀元前 1200 年の破局」とされる。<sup>7</sup>

しかしながら、この破局はその後の古代ギリシア文明との完全な断絶を意味するのではなくむしろ連続性が近年では注目されるに至っている。

<sup>4</sup> 周藤芳幸、平成 18 年、『古代ギリシア地中海への展開』京都大学出版会。

<sup>5</sup> 周藤芳幸、同上。

<sup>6</sup> 周藤芳幸、同上。

<sup>7</sup> 周藤芳幸、村田奈々子、平成 12 年、『ギリシアを知る事典』東京堂出版。

ギリシアが暗黒時代から歴史の表舞台に再登場する9世紀ころには東地中海の他の地域も新しい段階に入った。BC9世紀にアッシリア帝国が興り勢力圏を拡大してシリア・パレスティナの諸王国を吸収した。またこの時期にはフェニキア人都市交易網が拡大した。そのひとつの理由は、アッシリア人がつくりだした需要に応えるためだといわれる。フェニキア人の植民活動は、アフリカ北西部沿岸からシチリア、サルディニア、スペイン一帯に広がった。<sup>8</sup>

この時期にギリシア人の海外進出は飛躍的に高まった。イタリア海岸やシチリア、コルシカやフランス南岸へと広がり、エーゲ海北部の沿岸地方や黒海沿岸地方に及んでいる。とりわけエジプトとのつながりはわれわれの想像をはるかに超えている。BC8世紀後半または7世紀にギリシア人とエジプト人が直接交流する機会が増大したことはクレタ島やサモスで発見された青銅製品からもうかがえる。エジプトのプサメティコス一世（BC664-610）はカリヤ人（小アジア）とイオニア人の傭兵を雇っていた。前6世紀初頭にはギリシア人傭兵は3万人を超えているとされている。近年デルタ地帯では実際に傭兵の陣営だったと思われる大規模な遺構が見ついている。

ギリシア人の交易拠点としてナイル川デルタ地帯のナウクラティスが充てられた。同地はギリシア各地一キオス、サモス、ミレトスなどギリシア東部の出身者が集まってきていた。ナウクラティスは農業に基盤を置くのではなく交易や製造業を中心とする点で他の植民市とは異なっていた。主要な輸出品はエジプトの穀物でありオリーブ油葡萄酒や銀と交換された。また著名なギリシア人も多数ナウクラティスを訪れている。アテナイの立法者ソロン、ミレトスの哲学者ターレスそして歴史家のヘロドトスである。ナウクラティスはギリシア人にとってエジプトへの重要な入口となった。エジプトの思想や制度、美術や技術は古典期ギリシアの発展に大きな影響を与えた。

さらにヨーロッパの食文化の源はギリシアではなくエジプトである。パン、ワイン、レタスなどの野菜、種々の果物は圧倒的にエジプト起源のものが多い。<sup>9</sup>

ギリシア人の海外進出は様々動機付けを有していた。前3000年紀の初めにはギリシアに新しい生業の導入があった。オリーブとブドウである。オリーブ油とワインはギリシアが海外に進出していく際の重要な交易手段となった。エジプトの穀物とギリシアのオリーブ油とワインが交換されている。

ギリシアがアフリカ北岸に建設した植民市キュレネは典型的な植民地で、農業に適した土地として選ばれた。キュレネは人口過剰となったテラ島から来た植民者が建設した。その後すぐに、アポロニア（キュレネの港）、エウヘスベリデス（ベンガジ）、タウケイラ（トクラ）にも都市がつくられた。BC6世紀になるとキュレネはペロポネソス半島とドーリス系の島々から新たな植民者を招いた。植民市として先住リビュア人の関係はあまり記録が残っていないが、ナウクラティスのような文化の交流がなかったことは明らかである。BC525年ペルシアがエジプトを征服したときキュレネはペルシアに使節を送ったが後にペルシア帝国に併合された。ヘレニズム時代にも繁栄したがプトレマイオス王朝に吸収され独立国ではなくなった。

<sup>8</sup> ロバート・モアコット/桜井万里子監修青木純子訳、1998年『古代ギリシア一地図で読む世界の歴史』河出書房新社。

<sup>9</sup> 吉村作治、1992年、『ファラオの食卓—古代エジプトの食物語』小学館。

キュレネ建設の際の逸話は注意に値する。ヘロドトスによるとテラ人はリビアのプラテア島を植民先に定めると、バトスを指導者かつ王として植民団を編成し、二隻の五〇櫓船に乗せてリビアへ送り出した。しかし、彼らはいったんリビアへ向かったものの、どうして良いかわからないまま、テラへ引き返した。これに対してテラ人たちは植民団の上陸を許さず、ものを投げつけて出航を強制した。その後、植民団はプラテア島からリビア本土を転々とした後にようやくキュレネを建国したとある。<sup>10</sup>

キュレネ建国に関してはヘロドトスの記述のほかにも前四世紀にキュレネで建立された決議碑文が史料となっている。碑文にはそれぞれの家から息子を一人ずつ選ぶこと、ポリスによって植民団に徴集されながらこれに従わなかった者に対して死刑と財産没収が定められていることが明記されていた。さらに碑文には彼ら植民団がテラからの支援を受けることができないまま五年間にわたって植民市の建設を果たせなかった場合は帰国してテラ市民に復帰できると書かれている。<sup>11</sup>

ギリシア人の傭兵はペルシア戦争の際に複雑な問題を引き起こす。それというのもペルシア軍に多くのイオニア系を中心とするギリシア人が参加しているからである。そこで問題となるのは言語である。植民にせよロングステイにせよ現地で使用する言語は何かということが重要となる。現在のバンコクのように数万人の日本人が在住し医療機関でさえ日本語が通用し日本語のフリーペーパーが数種類あるようなところだと日本語でほとんどが間に合う。ペルシア戦争当時のペルシア帝国の言語状況が当然気になるところである。近年の研究により初めてペルシア帝国内部の言語状況、とりわけギリシア語は従来考えられていた以上に早く普及し始めていたようである。<sup>12</sup> ペルシア帝国はペルシア語を各地に押し付けることはなかった。その地で普及している言語で碑文などを作成している。小アジア地方ではギリシア語が公用語として使われた可能性が大きいと推定されている。<sup>13</sup> さらにギリシアとペルシアの関係は思ったより複雑である。第二次ペルシア戦争の際ギリシアとりわけアテネの指導者テミстокレスに見られるようにポリス内部の抗争に敗れた末に宿敵ペルシアの宮廷に亡命するギリシア人政治家がかなりの数見られるからである。同じインドヨーロッパ人でありながら言語的にはまず互いにコミュニケーション不能と思われるがスキタイ人などがリンクになっているのかもしれない。

ギリシア人の海外進出は必ずしも交易、農業、傭兵等に止まるものではない。ナポリ湾の沖合にあるイスキア島にエウボイア系のギリシア人が交易の拠点を置いたのは前8世紀のことだった。ピテクサーイの名で知られる遺跡のメツヴィア地区で発掘された工房跡には高熱を受けた痕跡のある床面から大量の鉄のスラッグが出土し、ここで鉄鉱石の製錬が行われていたことが明らかになった。また他の個所では最初期のギリシア人が溶鉱炉の遺構なども発見されていてピテクサーイのギリシア人が、エルバ島で産出する鉄などの鉱物資源を求めてこの地に到来して冶金業

<sup>10</sup> 周藤芳幸、平成18年、『古代ギリシア地中海への展開』京都大学出版会。

<sup>11</sup> 周藤、同上。

<sup>12</sup> Hellenism, Hellenization, Hornblower ed., 1996 Classical Dictionary, Oxford.

<sup>13</sup> ピエール・ブリアン／小川英雄監修／柴田都志子訳、1996年、『ペルシア帝国』創元社。

を生業としていたことがわかった。<sup>14</sup>

植民が現地の人間の暴力的排除を伴う時もある。トゥキュディデズによれば、シチリア島に最初に植民を行ったのはエウボイア島のカルキス人だった。植民指導者トゥクレスに率いられた植民者たちは前734年にエトナ山の麓の岬にナクソスを建国した。その翌年、ヘラクレイダス一門のアルキアスに率いられたコリントスからの植民団が、現在のシラクーザの旧市街にあたるオルテュギア島から先住民であるシケロス人を駆逐してシュラクーサイを築いた。前728年にはナクソスのギリシア人はシケロス人と戦い、まずレオンティノイを、ついでカタネを建国した。ギリシア人の植民活動で注意しなければならない点は拠点もしくは植民市を往来する商人だけでなくエジプトへの傭兵も一定期間エジプトに定住した後に祖国へ帰還した点である。これはまさしく古代ギリシアのロングステイと言えるだろう。

観光研究は普遍的な「移動学」の一部門に位置付けられるべきであろう。「移動」「移住」「遊牧」に対する関心はようやく高まりつつある。人間はそもそもの始まりから移動、移住を旨とする存在と思われる。農耕民を中心とする日本人も固定的な定住志向の観念から自由になり世界、日本を再考する必要があるのではなかろうか？

---

<sup>14</sup> 周藤、同上。

## 後 記

ギリシア現象を考える際に気になるのはフェニキア人の存在である。<sup>1</sup>地中海の海洋民族としてはフェニキア人を無視することは到底出来ない。ギリシア人とフェニキア人は双方影響しあいながら古代地中海世界をリードしていくことになる。しかし、フェニキア人にとり歴史上極端に不利な条件がある。その最大の点は彼ら自身の手になる文書類がほとんど残っていないことである。フェニキア人の故郷といえる近東レバンド地方の気候からエジプトから輸入した大量のパピルスに記した文書はたやすく腐敗し跡形もなくなった。またフェニキア人が建国したカルタゴ帝国の図書館も第三次ポエニ戦争でローマ人により大半のカルタゴ人同様灰燼に帰した。

このようにしてわずかに残された碑文や粘土板の史料と考古学的発掘によりフェニキア研究は徐々に進展してきた。しかしながらロングステイ研究の観点からみるとギリシア人の場合とは異なり個別的な記録がほとんど残されていないためにフェニキア人が地中海とりわけ西地中海に建設した数多くの植民地および出身地のレバンドとりわけテュロス(チルス)、シドンとの関係の詳細は知るべくもない。

ここでは近年のフェニキア研究の成果を概観しギリシア人と比較しながら気になる点を二、三指摘して今後の課題としたい。

環境の相違。フェニキア人がレバンドを根拠地としたことは確かに紀元前12世紀に東地中海一帯の様々な文明を滅ぼしたり激甚な影響をもたらした「海の民」とカナン人の混淆によりフェニキア人の母体が作られたという点では一つの僥倖ともいえるだろうが数百年にわたりアッシリア、古代エジプト、新バビロニア、アケメネス朝ペルシアに支配された点を無視できない。確かに論者によってはフェニキア人の抜け目なさ、狡猾さはこうした列強下でのサバイバル努力から生まれたものかもしれない。

これに対してギリシア人は数多くの島々、島嶼からなりたちこれらの大国の影響を不断に受けることは少なくともフェニキア人よりは少なかった。ギリシアは地政学的に有利な位置にあったといえよう。もちろんギリシアとりわけアテネ、スパルタの最大の危機がペルシア戦争であることは言うまでもない。しかもアケメネス朝ペルシアの海軍の中核はフェニキア海軍であった。フェニキアにしてみれば既に西地中海で最大のライバルと化していたギリシアをペルシアの強大な軍事力の一端として蹴落とすことは地中海をわが海とする絶好のチャンスであったろう。またペルシア戦争当時すでに独立国であったカルタゴはペルシアと連動して西地中海でのギリシアの植民市が点在するシチリア島とイタリア南部のギリシア人を攻撃するプランもあったとされる。単独では大国に対抗できないフェニキアの限界を表したとも言えよう。

ロングステイの観点から見るとギリシア人が海外に雄飛し植民市を建設しても母国(母市)と関係が切れなかったのに対しフェニキア人の場合は完全に切れたとは言わぬまでもかなり弱くなっていった。母国は不断に大国の支配下にあったのである。

大地と海：レバンドにおけるフェニキア人の都市国家が岬、半島、沖合の島などにたてられたことはよく知られている。彼らの視線は常に海に向かっていたと言えよう。フェニキア人の生業は交易の民と言われているようにまず交易である。その際注意しなければならないのは彼らの船



である。決して大きな船ではない。従ってかさばる物資を運ぶことは不利である。彼らが海運で運んだのは高価なものが中心となる。金、銀、銅、鉄などの金属である。さらにこれらを素材とした加工品である。素材に付加価値を加えたものである。さらには紫の染料やそれで染めた衣類、あるいは当時の重要な容器アンフォラである。フェニキア人の進出先の多くがこれらの金属の鉱山がある地点である。キプロス島、シチリア島、そしてイベリア半島である。その際に既存の勢力が開発を行っている場合は物々交換、そして鉱山の買い取りや略奪へと進むことが多い。レバンドのフェニキア人は生業は農業とは言い難い。それに対してカルタゴは交易を中心としながらもやがてアフリカの領土を拡張し後代のローマのラテフンディウムの前身ともいえる大農園をつくり経営する。

これに対してギリシア人の生業は地中海の三大農産物と言われるオリーブ、ブドウ、小麦（大麦）の栽培であった。ギリシア人の海外進出もフェニキア人と同じく鉱物資源獲得に動機づけられることもあった。シチリア島、サルディニア島など。ギリシア人の場合、農民が兵士とりわけ重装歩兵となるがフェニキア人やカルタゴ人の場合は基本的に傭兵が中心である。但し、これらの重装歩兵の過度の評価は要注意である。ペルシア戦争における後世のギリシア賛美に繋がるからである。

上述のようにギリシア人といえども極めて多様性に満ち様々な民族を取り込む傾向が大きかった。とりわけギリシアの宗教や文化が周囲の民族に大きな影響を与えた。カルタゴ人もヘラクレス信仰や建築様式果ては硬貨のスタイルまでギリシア様式を取り入れた。

ギリシア崇拜にならずにその影響力を再度吟味すべきであろう。

---

<sup>1</sup> フェニキアについては以下の文献を参照。

栗田伸子、佐藤育子、2009年、『興亡の世界史 03 通商国家カルタゴ』講談社。

グレン・E・マーコウ/片山陽子訳、2007年、『世界の古民族シリーズフェニキア人』創元社。

ゲルハルト・ヘルム/関楠生訳、1976年、『フェニキア人古代海洋民族の謎』河出書房新社。